

自然由来汚染土対策に熱視線

(一社)泥土リサイクル協会

札幌でスキルアップ勉強会

(一社)泥土リサイクル協会(愛知県稲沢市、木村孟理事長、☎0587・233・2713)は3月6日、札幌市内の会場で「自然由来汚染土の有効利用促進のための」をテーマに、北海道地区スキルアップ勉強会を開催した。北海道地区はこれ

での新幹線延伸工事が本格化する。火山地帯が多いことから今後はトンネル工事で大量の自然由来の汚染土の発生が想定される。当日、会場には建設業界や産廃処理業界など関係者が、当初予定30人の3倍以上となる約1000人が参加した。協会の野口真一事務局長は、自然由来で基



想定以上の3倍以上の人員を集めた北海道地区の勉強会

準超過している建設発生土を有効利用するため、(独)産業総合技術研究所がまとめた国内重金属の分布図を紹介し、当該工事で発生するおそれのある汚染土の有害物質を事前に把握する程度想定できることを示した。

学識者などの有志で構成する自然由来を考慮するフィールド・カフェの報告にも触れ、自然由来の汚染土対策のラストや環境負荷低減の障壁になっている課題として、地質や実汚染サイトにおけるモニ

タリングなど事前情報、調査・試験・評価・措置、情報伝達、用語の4点を挙げた。北海道大学大学院工学研究所の佐藤努教授は「自然由来汚染土に

対して適切に対応するために必要な化学的知見からの汚染土対策の必要性を説いた。自然由来の汚染は

すべて鉱物から来ていること、問題は重金属の元素ではなく、特定の分子など化学形態(化学スペシエーション)にあることを示した。(独)土木研究所寒地土木研究所の田本修一氏は「環境安全性に配慮した建設発生土の有効利用技術に関する研究」について話し、ラム試験結果で火山灰はヒ素に対する吸着効果が高いことを報告した。

土対策の必要性を説いた。自然由来の汚染は